

研 究 分 野	資源管理	部 名	資源管理部
研 究 課 題 名	多元的資源管理型漁業推進事業 太平洋・陸奥湾地域		
予 算 区 分	漁業調整費 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.15 ~ H.16		
担 当	蛸名 政仁		
協 力 ・ 分 担 関 係	水産振興課、水産庁、(独) 東北区水産研究所八戸支所、		

〈目的〉

これまで資源管理計画を策定した魚種について、質・コストを一体とした取組を推進するための調査を実施するとともに、底びき網漁業改善調査及び刺網漁業改善調査の継続と漁獲動向をモニタリングする。

〈試験研究方法〉

1 漁獲動向調査

ヒラメ (第Ⅰ期対象魚種)・マコガレイ (第Ⅱ期対象魚種)・ミズダコ (沿岸特定魚種) 漁獲量は、県統計並びに関係漁業協同組合から漁獲資料を収集して行った。

2 底びき網漁業改善調査

太平洋地域の小型機船底びき網漁船全数の 10 隻に標本船を設定し、投網場所や漁獲物などの操業実態を把握した。

3 刺網漁業改善調査

太平洋・陸奥湾地域でそれぞれ 5 隻ずつ計 10 隻の刺網漁船に標本船を設定して、使用反数や投網場所並びに漁獲物などの操業実態を把握すると共に、自記式水温計を用いて漁場 (海底) 水温の観測を実施した。

4 さしあみ資源管理試験

刺網漁業により漁獲される漁獲物の鮮度向上と労働時間短縮を図るための基礎資料を得るため、三沢市沖合で刺網操業時間短縮試験を実施した。

〈結果の概要・要約〉

1 漁獲動向調査

ヒラメの漁獲量は、593 トンで前年より 200 トン減少、過去 5 カ年平均の 69%であった。 (図 1)

マコガレイの漁獲量は、388 トンで前年より 111 トン増加、過去 5 カ年平均の 116%であった。 (図 2)

ミズダコの漁獲量は、2,428 トンで前年より 353 トン減少したが、過去 5 カ年平均の 97%であった。 (図 3)

2 底びき網漁業改善調査

投網回数、水深等の漁獲努力量情報並びに魚種別漁獲物の情報を海区別に整理し、漁場マップの更新を行った。主要魚種の漁獲動向は、マコガレイ、マダラ、スケトウダラ・バンバガレイは増加傾向、ヒラメは減少傾向であった。

マコガレイの漁獲尾数の割合は各年とも 1 歳魚が全体の約 60%を占め、次いで 2 歳魚が約 20%、3 歳魚から 7 歳魚までは約 20%となっている。経年変動では、1997 年以降の増加傾向が 2000 年にピークとなり、その後、減少傾向となり 2002 年には約 100 千尾まで減少したが、2003 年以降、再び増加傾向を示し 2004 年には約 300 千尾と過去最高になった。

2004 年の年齢別漁獲は、1 歳魚が約 200 千尾と前年比 266%で著しく増加しており、この 2003 年級群が卓越した資源を構成していることが推察される。

今後は、卓越年級群が発生する機構を解明していくことと同時に、発生後の早い時期にその兆候を捕らえる調査や情報収集、そして、若年な小型サイズを保護する為の漁具改良などについても検討しながら、資源管理型漁業の推進を進めて行く必要がある。

3 刺網漁業改善調査

1999 年以降太平洋・陸奥湾地域のカレイ刺網の目合は、3 寸 5 分未満の目合から 3 寸 5 分以上の目合に拡大され、小型魚保護による資源管理の効果が期待される。

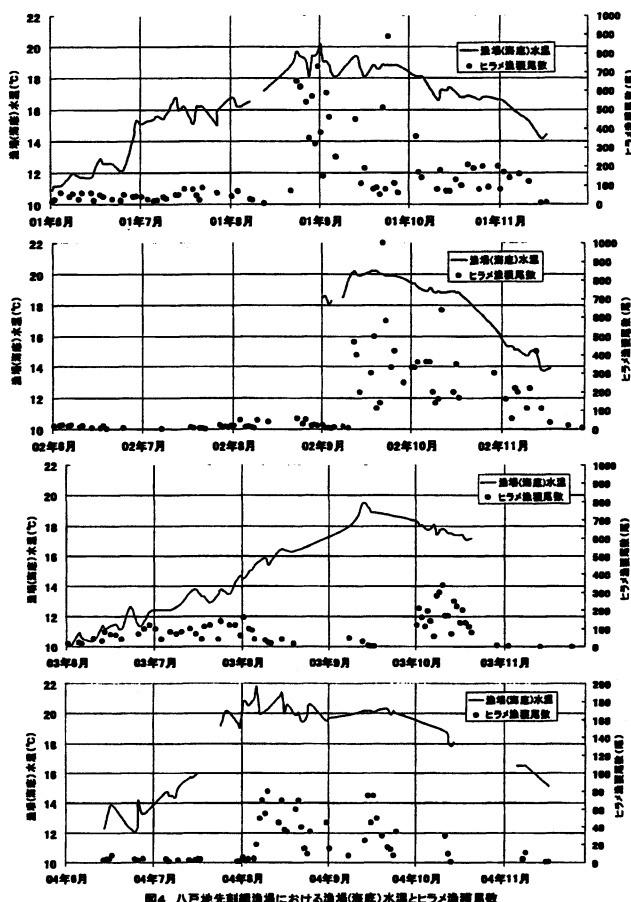
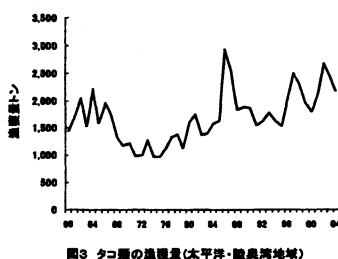
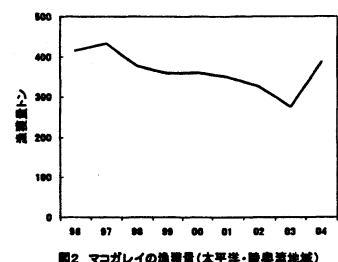
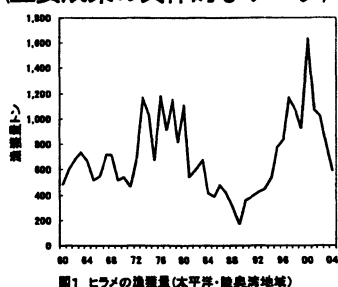
刺網に水温計を設置して漁場（海底）水温を観測した結果、ヒラメ漁獲尾数が急激に増加して盛漁期入りと判断された時期は、各年共に水温が 19℃から 20℃に達した時期と一致した。その後、19℃以上の年間で最も高水温となった期間に高い漁獲水準を維持し、水温が 17℃から 18℃台に低下すると急激に漁獲は減少した。（図 4）

ヒラメの盛漁期形成要因には、水温が大きな影響を及ぼしていることが明らかとなり、ヒラメが生息場所の水温変化に応じて生息場所を変化させていることが確かめられた。

4 さしあみ資源管理試験

浸漬時間を 3 時間程度にした短時間の操業では、漁獲物は総て活魚扱いとなり、単価の向上（最小サイズの銘柄を除き）や、揚網時に漁獲物の取外しが可能となることから労働面でも作業時間の短縮が図られ、魚価の向上とコスト削減に繋がる効果があるものと推察される。今後は、漁業者自らが漁獲するヒラメの状況に合わせて目合いの変更や短時間浸漬方法に切り替えて操業するなど、積極的な資源管理型漁業の推進が必要と思われる。

〈主要成果の具体的なデータ〉



〈今後の課題と次年度の具体的な計画〉

本事業は今年度で終了。

平成 17 年度は資源回復計画の県単魚種として、本事業で進めていたイカナゴ、ヒラメ、マダラについて協議検討する。

〈結果の発表・活用状況等〉

- ・調査結果は、各種会議や研修会（多元的資源管理型漁業促進委員会、太平洋・陸奥湾地区漁業者検討会、小型底びき網漁業船頭会、東北ブロック底魚研究連絡会議）で関係機関や漁業者に報告し、研究成果を普及した。
- ・調査結果の詳細は、平成 16 年度多元的資源管理型漁業推進事業報告書（青森県 平成 16 年 3 月）に記載。